

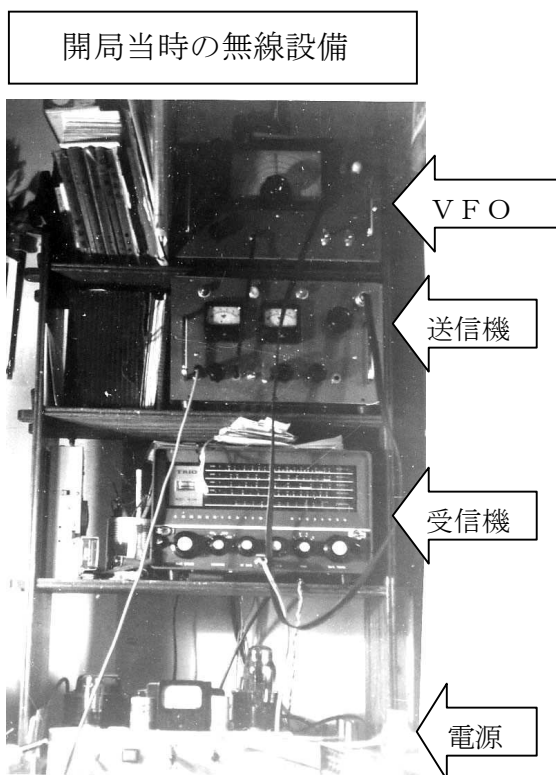
移動運用の今と昔

JAIWOB 斎藤 章

私の無線局運用スタイルは、移動運用が 60% モービル運用が 20%固定運用が 20%の割合でハムライフを楽しんでいます。

1966年の3月に開局して40年になります、開局当時は、50MC AMオンリーで運用していました。いや、、50MCの送信機しか有りませんせんでした。

それも今の様なコンパクトな無線機ではなく、送信機、受信機電源の3点セットで、写真の様に高さ1m幅60cm位の本棚に納めて運用していました。



免許状には移動可能範囲は日本国内の陸上と海上と記載してありましたが、これでは簡単に移動運用は出来ませんでした。

それでも、高い山から50MCでQRVする局は、AM波でも強力に59++で飛んできました。

高校の無線部仲間と「高尾山」へ移動運用をする事になり準備を始めました、今の様に朝天気が良いから移動運用でもするか〜と、ゆう訳にはいきませんでしたから、事前の準備が必要でした。

まず、AC電源の確保からで、高尾山山頂の茶店からAC電源を借用する交渉をして、1日500円で借りられる事を確認しました。

次に無線設備と移動用具の確認です。

- 1、送信機+変調機+電源 1個 リードのケース AS-2
- 2、受信機+電源 1個 リードのケース AS-2
- 3、アンテナ+同軸ケーブル1個 タニーの3エレ
- 4、アンテナのポール 1個 竹ざお2~3本+針金
- 5、故障対策 半田+半田こて+テスター+工具一式
- 6、食料、飲み物 ログなど

以上の様に、無線局の引越しみたいでした。

従って、1人で移動運用するなんて考えられません、つまり上記の1番から4番までは一人1個ずつ荷物を担当するので、最低でも4人は必要でしたし、それらを収める鞆等も無いので裸のまま電車に乗せて移動しました。

乗客から奇異な視線を感じましたが、若さと馬鹿さと無線への情熱があり、気にならなかつた様でした。

また、故障対策の 半田+半田こて+テスター+工具一式は必ず必要でした、固定で正常に動作していた無線機も移動途中で、半田付けが不良になる事もありました。

この高尾山移動の時も、送信機が不調になり、山頂で修理しました、今のRIGの様に複雑でなく、3ステージの送信部と、2~3段運用程度の変調器でした。

また受信機もごく普通の高1中2のスーパーヘテロダインとク

リコンで、回路図は頭の中に入っていました。

送信機の修理も完了し、CQを出すとパイルアップになりました、この時の快感は今の移動運用でも変わりません、またAMなので普段は固定で悩ませられていたイグニッションノイズも山の上には無いので快適でした。

そして40年過ぎた、今の移動運用に使用する無線設備は。

- 1、無線機 1個 FT-817 13.5cm x 3.8cm x 16.5cm
- 2、電源 1個 シール BATT 15cm x 3cm x 2cm
- 3、アンテナ+同軸ケーブル 1個 110cm x 20cm x 15cm
- 4、アンテナポール 1個 110cm x 10cm
- 5、その他 ロープ、ビニールテープ
- 6、食料、飲み物 ログなど

項目こそ昔と変わりませんが1番2番5番6番は全てザックの中に入り、3番4番は釣竿ケースに全て収まりますので、1人で移動運用が可能です。

下の写真は移動した際の移動中の姿と、移動運用風景です

三頭山移動途中の鞆口峠で小休止



日の出山山頂の FT-817 と HB 9 C V



今の移動運用は、車を有効に利用して楽しむ事が出来ます。
車で登れるだけ登り、1時間程度徒歩で登れば素晴らしいロケ-ンから移動運用を楽しむ事が出来ます。

開局当時（1966-1967）にフィールドデーに参加する為に3人で山梨県道志村にある、焼山に3時間位掛けて登り5エレの ANT を山頂に上げた途端に、雷が鳴りだしてトランシーバーだけを抱えて、窪地の水場まで非難し事もありました、今なら多分撤収して、車で下山したでしょうが、せっかく3時間掛て登ったので、1時間位雷が通過するのを待ちました。

昔も今も、FB なロケ-ションからの移動運用は楽しいもので、昔（40年前）と比べてお手軽移動運用が出来る環境なので、240 各局も、モバイル移動の運用だけで無く、車を降りて30分も歩くとモバイル移動運用とは違う世界があると思います。大自然の中での移動運用はV Y F Bで、日ごろのストレス解消には、絶大な効果があります。

是非、お試しあれ。

おわり